

概説

クモガタ類

クモガタ類（蛛形類、クモ形綱）は基本的に頭胸部と腹部の2部からなる体と、6対の付属肢（1対の鋏角、1対の触肢、4対の歩脚）をもつことを特徴とする陸生の節足動物で（二次的に海産となったものはある）、クモ、ザトウムシ、カニムシ、サソリ、ダニなどが含まれる。島根県レッドデータブックではこれまでクモ目しか調査対象に入っていなかったが、今回新たにザトウムシ目を対象に加えた。

1. 島根県のクモ相

島根県でこれまでに生息が確認されているクモ（クモ目）は、45科459種である（鶴崎 2026）。この数は近隣4県で記録されている種数、鳥取県457種、広島県423種、山口県312種、岡山県636種（新海ら 2024）と比べても遜色がない。ただし、記録は一部の地域に偏っており、山地での調査や次に記すように隠岐諸島での調査はまったく十分ではない。今後さらなる調査が望まれる。

隠岐諸島での既知種数を景山（2016）は182種としているがこれは未公表記録を多く含むようで、公表記録としては165種、島別では島後140種、中ノ島49種、西ノ島49種、知夫里島14種で、島前の3島での調査がとりわけ遅れていることがわかる。本土側の440種を合わせた種数面積関係で面積と種数を対数表示にしたグラフで描かれる直線の傾きを表すZ係数は0.51であるが（鶴崎 2026）、隠岐諸島での調査が進めばこの数値はもっと小さくなるであろう。

2. 選定種の概要

クモに翅はないがバルーニング（腹部末端から糸を出しそれを上昇気流にのせて飛ぶ）という長距離分散手段をもつ種が多く、ある種がある場所で見つかってもはたしてその種がそこに定着しているのかがはっきりしないものが多い。生息地の環境悪化や個体数の増減をある程度まで判定できる種はコガネグモのような一部の大型種かトタテグモ科やジグモ科などの地中営巣種や移動力が低く地理的分化が顕著な種（ホラヒメグモ科、ナミハグモ科、ヤミサラグモ属）に限られる。今回はこれらの中から、イ

ソコモリグモを絶滅危惧II類、キノボリトタテグモとワスレナグモ、およびエンムスビヤミサラグモの3種を準絶滅危惧種で選定した。

3. 島根県のザトウムシ相

ザトウムシはおもに山地の森林内に生息する一見クモに似た動物である。クモとは頭胸部と腹部の間がくびれないこと、眼が常に2個であること（クモでは8個または6個）、糸を出さないことなどで区別できる。本類は乾燥に弱く森林を離れて生活できないため地理的分化の顕著な種が多い。

島根県ではザトウムシは26種（鶴崎 2006および鶴崎未発表）が知られている。うち本土側島根県24種、隠岐諸島は13種である。隠岐諸島には本土側とは異なる染色体数をもつ集団や地理的品種が見られるが、いまのところ隠岐諸島固有種は見つかっていない。

今回、海岸または河川感潮域に生息に限られるヒトハリザトウムシ、三瓶山が本県唯一の生息地となっているゴホントゲザトウムシ、ブナ帯に生息するが近年個体数の減少が著しいヒライワスベザトウムシの3種を準絶滅危惧種で選定した。

（鶴崎展巨）

参考文献

- 景山純孝（2016）クモ類, pp. 223-229. 島根県環境生活部景観自然課（編）改訂しまねレッドデータブック2014動物編, 島根県環境生活部景観自然課317 pp.
- 新海 明 安藤昭久 谷川明男 池田博明 桑田隆生（2024）C D日本のクモ ver.2024
- 鶴崎展巨（2006）島根県のザトウムシ類: 種のリストと地理変異, pp. 55-72. In: 日本生物教育会島根大会実行委員会（編）新島根の生物, 日本生物教育会島根大会実行委員会（出雲市）, 274 pp.
- Tsurusaki, N., Takanashi, M., Nagase, N., and Shimada, T. (2005) Fauna and biogeography of harvestmen (Arachnida: Opiliones) of the Oki Islands, Japan. Acta Arachnologica, 54: 51-63.
- 鶴崎展巨（2026）島根県の真正クモ類（クモガタ綱クモ目）, ホシザキグリーン財団研究報告, 29: 173-210.

クモ類掲載種一覧

計7種

絶滅危惧II類 (VU)

- ・イソコモリグモ

計1種

準絶滅危惧 (NT)

- ・ワスレナグモ
- ・キノボリトタテグモ
- ゴホントゲザトウムシ
- ヒトハリザトウムシ
- エンムスビヤミサラグモ
- ヒライワスベザトウムシ

計6種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種（3種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（0種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（0種）
- ：新規掲載種（4種）
- ◇：情報不足からの変更種（0種）
- ◆：情報不足への変更種（0種）

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

クモ目コモリグモ科

イソコモリグモ

Lycosa ishikariana (S. Saito, 1934)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 鶴崎展巨

島根県固有評価

分布限界種(南西限)

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



選定理由

規模の大きい砂浜海岸にのみ生息するが、それらは概して縮小傾向で営巣数も少ない。

概要

体長20mm内外と大型のコモリグモで、規模の大きい海浜に生息する。コモリグモ科の種多くは地表徘徊性で住居をつくらないが、本種は海浜植生の周囲の裸地や後浜の砂地に深さ30cmほどで直径約10-15mmの縦穴を掘り、日中はその中に潜む。巣穴入口は細い糸でかがられるので他の海浜動物の巣穴とは区別できる。中にクモがいる巣穴の入口は真円で、これが真円でない巣穴は何らかの理由でクモが不在で放棄された巣穴である。メスは卵のうと孵化直後の幼クモを保護するが、春に孵化した幼クモはじきに自力で巣穴をつくるので、巣穴が多くみられるのは5月頃である。夏季には日中は巣穴入口を閉じるので巣穴を発見しづらい。成体になるまでに約2年を要すると考えられている。本州と北海道、国後島に分布。生息地は日本海側に多く鳥取県は南西限。太平洋側では茨城県が南限。国外では知られない。

参考文献

Suzuki, S., Tsurusaki, N. and Kodama, Y. (2006) Distribution of an endangered burrowing spider *Lycosa ishikariana* in the San'in Coast of Honshu, Japan (Araneae: Lycosidae). *Acta Arachnologica*, 55:79-86.
 谷川明男(2021) イソコモリグモの高度に多様化した集団構造. *海洋と生物*, 43: 38-42.
 Tanikawa, A., Shinkai, A., Tatsuta, H. & Miyashita, T. (2017) Highly diversified population structure of the spider *Lycosa ishikariana* inhabiting sandy beach habitats. *Conservation Genetics*, 19: 255-263.

県内での生息地域・生息環境

出雲市、江津市、大田市、浜田市、益田市(戸田小浜海岸が分布西限)(Suzuki et al. 2006)。隠岐諸島では確認されていない(おそらくいない)。島根半島の砂浜海岸でも未確認。

存続を脅かす原因

工事や侵食による砂浜の消失や海水浴等による砂浜の過度な利用による踏圧、オフロード車の砂浜への進入が最大の脅威と考えられる。本種の良好な生息地であった江津市浅利海岸には現在数基の風車が建設されており影響が懸念される。

特記事項

日本各地の集団のミトコンドリアCOI遺伝子による系統解析では鳥取砂丘から島根県西部までの集団は他と異なる一群を形成し、かつ、遺伝的多様度が高く、祖先的な性質を残していると考えられている(Tanikawa et al. 2017, 谷川 2021)。本種の生息には広面積の砂浜が必要である(山陰地方の海岸での解析では幅60m以上、全長990m以上: Suzuki et al. 2006)。(執筆者: 鶴崎 展巨)

準絶滅危惧 (NT)

クモ目ジグモ科

ワスレナグモ

Calommata signata Karsch, 1879

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 鶴崎展巨

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)



選定理由

島根県内での生息地が限定される。

概要

体長メス17mm内外、オス7mm内外。平地の畑地、草地、公園の芝生などの相対的に柔らかい土質の地中に10-30cm程度の巣穴をつくる。巣穴の内壁面は細かい糸で裏打ちされており、地表面の円い巣穴入口に扉はない。雌は年中、雄(島根県では未確認)は9-10月に採集される。本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布。

参考文献

皆木宏明・景山純孝(2012) 島根県西部で初記録となるワスレナグモ(クモ目:ジグモ科)について. *島根県立三瓶自然館研究報告*, 11: 65-67.
 佐藤隆士・和田年史・中島ちづる・鶴崎展巨(2007) 新たに確認された鳥取県東部のワスレナグモの生息地. *山陰自然史研究*, 3: 6-10.
 鶴崎展巨(2026) 島根県の真正クモ類(クモガタ綱クモ目). *ホシザキグリーン財団研究報告*, 29: 173-210.

県内での生息地域・生息環境

出雲市、津和野町、隠岐の島町。

存続を脅かす原因

生息地の地表が高茎の雑草で覆われないように、芝生が維持管理されることが大切と考えられる。

(執筆者: 鶴崎 展巨)

準絶滅危惧 (NT)

クモ目トタテグモ科

キノボリトタテグモ

Conothele fragaria (Dönitz, 1887)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 鶴崎展巨



選定理由

広域で見ついているが、どこでも個体数は少なく生息数が減少したと考えられる地点もある(松江城)。

概要

体長メス10mm内外、オス7mm内外。体は黒紫色。やや薄暗い神社境内の石垣や石灯籠、古木の樹幹のくぼみなどに片開きの扉をもつ長さ2-3cmの袋状の住居をつくり中に潜む。住居の表面は泥や樹皮碎片で覆われ発見しづらい。成体は、雄は5-7月、雌は周年みつける。分布は本州(南部)、四国、九州、南西諸島。日本固有種。

参考文献

皆木宏明(2012) 島根県におけるキノボリトタテグモの分布について。島根県立三瓶自然館研究報告, 10: 35-38.
鶴崎展巨(2026) 島根県の真正クモ類(クモガタ綱クモ目)。ホシザキグリーン財団研究報告, 29: 173-210.

県内での生息地域・生息環境

松江市、雲南市、大田市、奥出雲町、安来市、飯南町、邑南町、江津市、浜田市、益田市、隠岐の島町。やや薄暗い樹林地の石垣、石段の側面、古木の樹幹などに営巣。

存続を脅かす原因

神社境内の樹林伐採、過度の清掃、石垣のコンクリートによる目張りなどは本種の生息に大きく影響する。

(執筆者: 鶴崎 展巨)

準絶滅危惧 (NT)

クモ目サラグモ科

エンムスビヤミサラグモ

Arcuphantes enmusubi Ihara, Nakano & Tomikawa, 2017

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

島根県固有種

環境省カテゴリー

-

撮影者(提供者): 井原 庸



選定理由

島根半島の西部の一角のみに生息する。生息地が低地であり温暖化や近年の夏季の小雨で生息環境が悪化していると考えられる。

概要

体長メス2.5mm、オス2.4mm内外。林床にシート網をつくる小型のクモ。体は黒褐色で腹部背面に数個の小白色斑がある。本類は多くのクモでみられるパルーニングをしないようで、地理的種分化が顕著で50種以上が知られる。中国地方にはメスの外部生殖器(外雌器)が伸張したナガエヤミサラグモ種群に属するヒバヤミサラグモなど数種が側所的に分布するが(Ihara 1995)、近年の分子系統解析で島根半島西部の集団は最近の出雲平野南側の集団(サイトウヤミサラグモ)とは別クレードであることや生殖器の形態差から独立種として本種が記載された(Nakano et al. 2017)。タイプ産地が唯一の既知産地。島根県固有種。

参考文献

Ihara, Y. (1995) Taxonomic revision of the *longiscapus*-group of *Arcuphantes* (Araneae: Linyphiidae) in western Japan, with a note on the concurrent diversification of copulatory organs between males and females. *Acta Arachnologica*, 44: 129-152.
Nakano, T., Ihara, Y., Kumasaki, Y., Baba, Y. & Tomikawa, K. (2017) Evaluation of the systematic status of geographical variations in *Arcuphantes hibanus* (Arachnida: Araneae: Linyphiidae), with descriptions of two new species. *Zoological Science* 34:331-344.
鶴崎展巨(2026) 島根県の真正クモ類(クモガタ綱クモ目)。ホシザキグリーン財団研究報告, 29: 173-210.

県内での生息地域・生息環境

出雲市大社町杵築東。林床の石下、朽木下、落葉落枝下。

存続を脅かす原因

宅地開発・道路建設などによる森林消失。温暖化による夏季の高温と小雨による林床の乾燥。

(執筆者: 井原 庸、鶴崎 展巨)

準絶滅危惧 (NT)

ザトウムシ目マザトウムシ科

ゴホントゲザトウムシ

Himalphalangium spinulatum (Roewer, 1911)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 鶴崎展巨

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足



選定理由

三瓶山が県内唯一の生息地で、潜在的に絶滅のおそれがある。

概要

体長1cm内外の大型でやや短脚のザトウムシ（マザトウムシ亜科）。体は黒褐色で腹部背面の中央に5個の短いとげが縦列する。明るい草地や人里周辺の明るい雑木林、タケ林などに生息。幼体越冬で、成体は5-6月頃に出現。メスはオスよりも2-3日早く成体に達する(Tsurusaki et al. 2025)。栃木県以西の本州、四国、九州に散発的に分布する。

参考文献

皆木宏明 (2023) 三瓶山室の内にてゴホントゲザトウムシの多数の死骸を確認。すかしば, 70: 62.
 Tsurusaki, N., Kawaguchi, M., Funakura, Y., Matsumoto, T. (2025) Reproductive phenology of an opilionid species maturing in early summer. *Himalphalangium spinulatum*, showing evidence of protogyny (Opiliones: Eupnoi: Phalangidae). *Journal of Arachnology*, 53: 13-19.
 鶴崎展巨・永幡嘉之・小松 貴・山本一幸・加藤貴範・渡辺弘之・西川喜朗・小橋理絵子・野嶋宏一・山地 治・岡本泰典・安達由莉・井原 庸・久家光雄・中野 進・山内健生・澤志泰正・大生唯統・三谷 進・酒井雅博・毛利俊樹・永本孝志・萩野康則・廣津敬也・山下又幸・澤田義弘 (2026) 日本国内におけるゴホントゲザトウムシの分布と記録。ホシザキグリーン財団研究報告, 29: 157-172.

(執筆: 鶴崎 展巨)

県内での生息地域・生息環境

大田市三瓶山。

存続を脅かす原因

管理放棄で林内が暗くなること。

特記事項

本種の生息地は人里周辺の竹林や雑木林に点在し人為的移入が示唆されるが、三瓶山は生息地が山地草原である3カ所（大分県九重山、滋賀県伊吹山）のうちの一つである。

準絶滅危惧 (NT)

ザトウムシ目カワザトウムシ科

ヒトハリザトウムシ

Psathyropus tenuipes L. Koch, 1878

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者): 鶴崎展巨

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

島根県内での生息地が限定される。とくに大橋川や宍道湖北東岸の生息地はこままで内陸にまで入り込んだ生息地は他になく貴重。

概要

体長5mm内外。腹部第2背板上に1本の短いとげがある（島根県では消失傾向）。ザトウムシでは唯一の海洋性の種で道路から離れ、砂浜と海食崖のそった自然海岸に多い。また河川感潮域にも生息地が見られる。卵越冬で成体は7月上旬頃から出現。たいていは年内に死亡。集合性が非常に強く、昼間は海岸の岩陰などに多数の個体が歩脚を重ねあわせて群棲する。暗くなってから浜辺でフナムシなどを食べる。

参考文献

鶴崎展巨 (2008) 宍道湖・大橋川におけるヒトハリザトウムシ（ザトウムシ目カワザトウムシ科）の生息記録。すかしば, No. 56, pp. 29-31.
 鶴崎展巨 (2021) 海洋性ザトウムシの外部形態とB染色体数の地理的分化。海洋と生物, 43(1): 43-49.
 鶴崎展巨 (2024) ザトウムシの染色体数の地理変異。生物の科学 遺伝, 78: 522-525.
 Tsurusaki, N. and Shimada, T. (2004) Geographic and seasonal variations of the number of B-chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida: Opiliones). *Cytogenetic and Genome Research*, 106: 365-375.

(執筆: 鶴崎 展巨)

県内での生息地域・生息環境

松江市大橋川、宍道湖、島根半島日本海側、隠岐諸島（隠岐の島町、中ノ島町、知夫里村）

存続を脅かす原因

海岸沿いに道路や防波堤が建設され砂浜海岸とオニヤブソテツなどが生える陸側の崖地が分断されること。

特記事項

B染色体と呼ばれる特殊な染色体を高頻度にもつ。鳥取県や山口県川棚では平均2-4個程度であることがわかっているが（Tsurusaki and Shimada 2004）、島根県の本土側集団は未調査で。隠岐諸島では4-8である（鶴崎未発表）。

準絶滅危惧 (NT)

ザトウムシ目カワザトウムシ科

ヒライワスベザトウムシ

Leiobunum hiraiwai (Sato & Suzuki, 1939)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

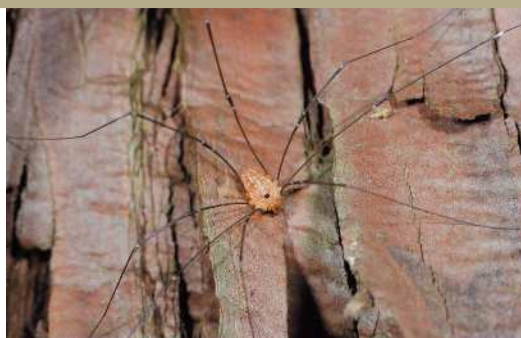
撮影者(提供者): 鶴崎展巨

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

島根県内での生息地が限定されるうえ、近年個体数が減少傾向。

概要

体長 雌雄とも4—5mm。ブナ帯以上の山地に生息し成体は7月上旬から9月頃にかけて樹幹上や草本上で見られる。オスはオレンジ色の体色でよく目立ち、ふつうメスよりもずっと多く見つかる。

九州北部、中国地方から関東北部にかけてのブナ帯、亜高山帯に分布するが、オス生殖器や染色体数などに地理的分化が見られる。島根県で見つかるのは九州広島型。日本固有種。

参考文献

Murakami, M., Kishimoto, K., Yamamoto, K., Komatsu, H., Tsurusaki, N. (2026) Geographic variation in external morphology and karyotypes of *Leiobunum hiraiwai* (Opiliones: Sclerosomatidae) in Tottori Pref. and adjacent areas in Honshu. *Acta Arachnologica*. (印刷中)

鶴崎展巨 (2006) 島根県のザトウムシ類: 種のリストと地理変異, pp. 55-72. In: 日本生物教育会島根大会実行委員会(編) 新島根の生物, 日本生物教育会島根大会実行委員会(出雲市), 274 pp.

Tsurusaki, N. (2006) Geographic variation of chromosomes and somatic morphology in the polymorphic species *Leiobunum hiraiwai* (Arachnida: Opiliones: Sclerosomatidae). *Zootaxa*, 1325: 157-190.

県内での生息地域・生息環境

大田市三瓶山、奥出雲町船通山、吾妻山、飯南町大万木山、浜田市金城町、津和野町青野山。

存続を脅かす原因

近年の温暖化と夏季の小雨。

(執筆者: 鶴崎 展巨)

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

進絶滅危惧

情報不足